

東京工業大学

窯業同窓会

会 員 名 簿 (昭和54年10月現在)

会 誌

〒152 東京都目黒区大岡山 2-12-1  
東京工業大学 工学部 無機材料工学科  
加藤 研究室 気付  
tel (03) 726-1111 内 2518

窯業同窓会会誌  
第15号  
目次

窯業同窓会規約	15-2
昭和53年度役員名簿	15-3
東京工業大学窯業同窓会の沿革	15-3
ご挨拶	会長 森谷太郎 15-4
会長退任のご挨拶	前会長 山内俊吉 15-5
New Ceramics と Composite Materials	副会長 齋藤進六 15-6
浜田庄司先生を偲ぶ	島岡達三 15-7
水地満穂さんを偲びて	井出善彌 15-8
故近藤連一教授の急逝を悼む	鈴木弘茂 15-9
訃報	15-9
第15回 Dr. G. Wagener 記念公開学術講演会	15-10
第16回 Dr. G. Wagener 記念公開学術講演会	15-10
昭和53年度 総会および懇親会	15-10
昭和52年度 収支決算報告	15-10
昭和52年度 事業資金寄付者芳名	15-11
昭和54年度 総会および懇親会	15-12
昭和53年度 収支決算報告	15-12
昭和53年度 事業資金寄付者芳名	15-13
東京工業大学における窯業教育の歴史的経過	15-14
母校の現状	15-16
大岡山だより	15-17
長津田だより	15-18
現代工業技術のタイムカプセル	15-20
大学祭で在校生が大活躍	15-21
あとがき	15-22

窯業同窓会規約

1. 本会は窯業同窓会と称する。
2. 本会は会員相互の親睦を図り窯業界の向上発展を期するを以って目的とする。
3. 本会は事務所を東京都目黒区大岡山東京工業大学内に置く。
4. 本会は第2条の目的を達成するために左の事業を行なう。
  - (1) 窯業技術懇談会
  - (2) 見学会
  - (3) 名簿の発行
  - (4) その他幹事会において必要と認めた事業
5. 本会々員は東京工業大学窯業関係者を以って組織する。
6. 本会の経費は、会員その他よりの事業寄付金、その他よりの収入をもって支弁する。会計年度は毎年4月に始まり翌年3月に終る。
7. 本会は毎年度始めに総会を開き左の事を行なう。
  - (1) 会務の報告

- (2) 役員の改選
- (3) 規約の改正
- (4) その他
- 8. 本会に左の役員をおき任期は 2 ケ年とする。  
但し再選は差支えない。
  - (1) 会長 1 名
  - (2) 副会長 若干名
  - (3) 幹事 若干名
  - (4) 常任幹事若干名
- 9. 会長、副会長および幹事は総会で選出する。常任幹事は幹事の互選とする。
- 10. 会長は本会を総理し、副会長は会長事故ある時、代行する。常任幹事は会務（庶務，会計）

- を処理する。
- 幹事は本会の重要事項を審議し、常時地方各職場並びにクラス等の状況、移動および本会に対する意見等を通報するものとする。
- 11. 本会は相談役をおくことができる。相談役は役員会において推薦し、総会において承認をうる。
  - 12. 本会に支部を置くことができる。支部は本部と連絡を密にし、本会の発展に協力する。

(昭和 52 年 5 月の総会において一部改正)。

## 昭和 53 年度役員名簿

会 長	森 谷 太 郎	相談役	伊 奈 長三郎
			鮎 川 武 雄
副会長	中 山 一 郎		石 塚 正 信
	田賀井 秀 夫		山 内 俊 吉
	田 辺 三 郎		倉 田 元 治
	齋 藤 進 六		江 副 勇 馬
			大 石 信 男
幹 事	加 藤 政 良	田 中 弘	大 庭 宏
	梅 田 夏 雄	田 代 仁	加 藤 守 光
	奥 田 進	奥 田 博	鈴 木 哲 夫
	伏 野 勅 明	牧 村 信 之	浅 野 正 和
	長谷川 安 利	田 村 信 一	井 関 孝 善
			愛 甲 昇
			遠 藤 幸 雄
			藤 井 豊 男
			亀 井 四 郎
			太 田 京 一 郎
常任幹事			
庶 務	加 藤 誠 軌	丸 茂 文 幸	上 西 義 介
会 計	小 坂 丈 予	名 取 賢 莊	山 根 正 之

## 東京工業大学窯業同窓会の沿革

本会は蔵前時代の東京高等工業学校窯業科第 1 回生以来同窓親睦の会として発足し、大正時代には鳥又會と称して、洋行および帰朝の送迎会や、地方から上京の同窓を迎えて懇親会を開いていたが、昭和の始め頃に愛窯會となり、昭和 8 年には窯業同窓會となった。さらに昭和 18 年に八日會（窯化會に通ずる）と改称して毎月講演と懇談の会を催していたが、太平洋戦争の戦局の悪化とともにその活動は中断された。しかしながら、戦

後の昭和 22 年に、会名を再び窯業同窓會と改称して活動を再開し、第 1 回の会員名簿を発行した。それ以来同窓会は年と共に発展し、毎年総会および懇親会を開き、ほぼ隔年毎に同窓会会員名簿を発行して現在に至っている。窯業同窓会は東京工業大学の窯業関係者、具体的には、窯業関係の卒業生、在學生、現職員および元教官その他で構成されている。

## ご挨拶

会長 森谷 太郎



このたび前会長山内俊吉先生の後をついで会長に就任いたすことになりました。元より私の任ではないと承知いたしておりますが前会長の御趣旨を体して何とか責を果して行きたいと思っております。また副会長には、伊奈製陶(株)会長田辺三郎氏，日本軽金属(株)社長中山一郎氏，東京工大名誉教授田賀井秀夫氏，東京工科大学長齋藤進六氏の方々に御就任いただきましたので，いろいろ御相談の上誤りないようにして行きたいと思っております。

また幹事並び常任幹事の方々には引き続きお願い申しあげましたが，大部分の方が心よくお引き受けいただきましたので，大きな変更なく今まで通り御尽力いただけることになりました。前会長山内先生には長い間会長として同窓会発展のため御尽力いただきましたが，今後共会の発展のためいろいろ御指導していただきたいと考えております。また副会長として同様に御尽力下さいました倉田元治氏，江副勇馬氏，大石信男氏の方々にもこれからも引き続き本会のため何かと

御指導賜りますようお願い申しあげる次第でございます。

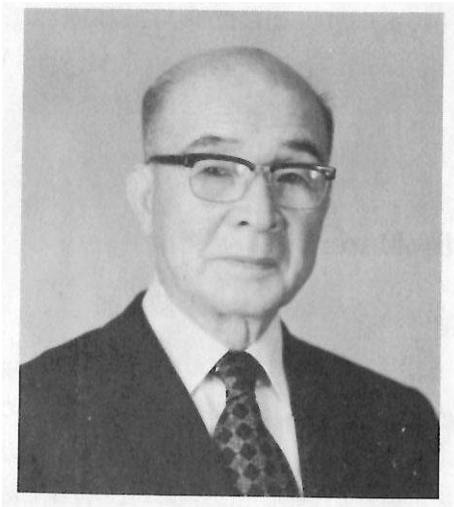
同窓会は何んといっても同窓の絆を堅くして行くことが大切であると思っております。そのためには皆様の相互連絡がいつも十分とり得ることが必要でありますので同窓会名簿と会誌を発行いたして参りました。今年はその発行の年に当りますので，皆様方のお手元にお届けいたすことになりました。何卒御利用いただきたいと思っております。なお名簿その他についてお気付の点や御意見がございましたらお知らせいただきたいと存じます。今後さらに一層よく御利用いただけるように努力いたしたいと思っております。

いま申しあげましたように同窓会は会員相互の親愛と絆を一層強めて行くことが大切であると思っております。本会は年に一回総会を開催することになっており，その際に懇親会を開いて会員相互の親睦をはかる機会をもつことにしております。親睦の回数を増し，会誌の発行回数を増強することは会員相互の親交を深めるための有効な方法であると考えられますが，そのためにはいろいろの付加的なものが伴います。年に僅か一回の数少ない同窓会の集いではありますが，この機会を十分以上に有効に目的達成に役立たせるために，出来るだけ多くの御参加をいただけるよう心から念願いたしております。千利休の言葉にありますように「一期一会」の精神こそ旧交を温めるのに最も大切な心掛けと思われれますので，一人でも多くの方が総会に御出席下さるようお願い申し上げます。

終りに会員の皆様様の御健康と御発展を心からお祈りいたしまして，ご挨拶といたします。

## 会長退任の御挨拶

前会長 山内俊吉



本年5月の名古屋での本会総会で会長を退任させていただきました。

会長という職は非常時局か或いは何か新しい変革を一つの軌道にのせるなどの時は交替しない方がよい場合もありますが、会が平穩に進行している時は、会長が適宜交替することは、それによって何となく新しい気分が出て清新な刺激を与え会の進歩につながる場合も多いように思うのであります。わが窯業同窓会は大野政吉元会長の御熱意によって一つの軌道にのり、私は氏の御逝去によって会長職を受け継ぎ、大野さんの路線を踏襲してきたわけであり、その間母校の機構の拡大、変革により学科の分裂、統合などがあり、他の学科の中には、その属する同窓会が従来の伝統を受けついでゆけないところも出だした中で、わが窯業同窓会は無機材料学科と学科名の変更はありましたが、昔のように工業材料研究所と一緒に学内幹事、教官各位の格別な御努力によって現在でも、なお昔の伝統をがっちり受け継がれ、毎年盛大な総会が開催されてきたことをご承知のとおりで誠におめでたい次第であります。このように和氣にみち平穩な窯業同窓会の会長は叙上のような見地から今後色々の方々にやっていただいた方が変化もあり会の発展にプラスになるという私の判断から役員の方々のご諒承を得て退任させていただいた次第で全く他意ありません。

そして新会長として皆々様充分御承知の森谷太郎さんが選任されました。何卒新会長を充分御支援下さいますよう会員の皆々さまによりしくお願い申し上げます。

わが窯業同窓会が常にたゆみない発展をとげてきましたのは同窓の皆々さまが本同窓会に対し親愛の情をもって毎年事業援助金をご寄付いただいたり、また役員やクラス連絡委員の方々が自分のこととして奉仕的なお世話をいただけてきたことや総会に私費を投じて遠い所の人々までが御参加いただくなど同窓会ならではのよい雰囲気のみなぎっているからであり、特に常任幹事の方々が常に献身的なご協力をいただけてきたおかげであります。

本同窓会は終戦直後の混乱に際し動静が不明な会員も多く名簿の整理に苦心を重ねましたが、昭和27年名簿と会報の合冊を出しその後経費の関係もあり隔年発行をつづけ、最近担当常任幹事のご努力によって大変立派なものになりました。今日にみえるところではこの名簿・会報の隔年発行と総会の開催とが本会の主な仕事になりました。そしてその和氣にみちた楽しい総会の席では毎年卒業50周年をお迎えの方々に会員全員からの心のこもった記念品を贈呈し、卒業以来長年にわたる数々の御功績をたたえその労をねぎらい、今後の御健勝をお祈りすることが極めて大事な行事となっております。

御承知のように母校も大きく発展し、今では大岡山も長津田もその敷地が狭くなりました。

そして再来年は創立100周年を迎えます。

会員である齋藤学長の今後の御健闘を祈り同窓諸氏の充分な御支援を切望いたす次第であります。

こうして同窓の皆々さまが睦み合い退去を追想しつつ御互に切磋琢磨し、森谷会長を中心として本会がさらに大きく発展することを祈念しつつ、今まで会長としての私におよせいただきました会員の皆々さまの御芳情に対し深い感謝を捧げつつ心からの御礼を申しあげ退任の御挨拶いたします。

(54. 9. 13.)

# New Ceramics と Composite Materials

副会長 東京工業大学学長 齋藤進六



人間の文化の歴史を振り返って見ると石器時代、青銅器時代、鉄器時代という具合に、その時代を支え、方向づけた「材料」の名前が冠せられている。これは極めて重大なことで、我々セラミックス材料の研究、開発、生産を人生の中心に捉えて来た仲間同志は勿論のこと、広く世間に再認識してもらわなくてはならないことである。嘗て、アメリカ、カルフォルニア州パークレイの加州大学教授であるバスク教授の家に招かれた時、何か記念に一筆書けと出されたアルバムに、上述の歴史的表現をもじって We, human being, were in the Stone Age, in the Bronze Age and are now in the Iron Age, but what are we going to be in the fourth coming Age - Image. というようなことを書いたことがある。最後の Image は Age, Age と続いた音声に合わせた音声語であるが、勿論その真意はイメージを心に抱く能力、想像力、強いては創造性というほどの意味である。

では、この「Image」という枠の中に何を当てはめるか、これは我々一同真剣に考えて行かねばならない問題で、或は宇宙衛星の出現を動機として、地球時代から壮大な宇宙空間に人類が歴史の一步を踏み出したという意味で「宇宙時代」と名づけるのもよいかも知れず、また多くの情報が一握りの為政者によって握りつぶされ、民主化が遅れていた時代から、情報が公開され、それによって「新しい精神と経済」の秩序ができるであろうという予測から「情報時代」というのも一つの見方であろうが、しかれば、材料屋として一言あるべきと要請されたら何というべきかは、我々に課された問いである。

代表的材料によって歴史を特徴づけようという試みとしては、既に「軽合金時代」、「ポリマー

エイジ」などの言葉があるが、それらは20世紀の繁栄を「石油」によって表現しようという考えが、その急速な枯渇に脅えて、むしろ「代替燃料」の時代に移行してしまったように、地球的年輪をあらわすにはあまりにも短く、さて如何にしたらよいかと想い煩う次第である。勿論、金属材料が「軽合金」を、有機材料が「ポリマー」を時代の先端に押し出して来たように、無機材料の立場からは「新石器時代」というのも面白い。これは新しい機能材料としてセラミックスが台頭してきたことを意味するものであり、現に通産省を中心としてファインセラミックスの位置づけが検討され始めたのも時代の要請をあらわしている。特に、今年、技振協を通じて調査が進められているファインセラミックスは機能材料の中でも、強度を中心とし機械部分用としての動向に注目している。しかし、翻って、前述の歴史的推移を見れば、石器、青銅、鉄とそれぞれの時代がバラバラに成立しているわけではなく、石器の発達を背景として、青銅が生れ、その発達の極限において鉄が使用されたわけで、時代を代表する材料が、その時代が過ぎると消えて行ってしまったわけではない。むしろ、時代が新しくなればなる程、多様な材料が併存し、それぞれの特性に最も合った使い方をされて来たわけで「競合併存の時代」といってよい。このように考えて来ると、競合しあいながら併存していたものを、補い合いながら新状態を創って行こうとする動力が発生するのは自然の成行であって、それがここ20年来模索を続けている複合材料の動向である。いわば、この成行は経済社会の発展に頗る類似していて、独占から競合へ、競合から対話へ、対話から自己規制への確立へと向っているのと同じである。しかし、対話からのもう一つの方向は相互拡散という現象がある。新世界の秩序は自己規制か相互拡散かのいずれかの選択をめぐって、更にいくつかの方向が生れるであろう。南北問題、東西問題はその当面の課題である。

やや筆が走ったが、材料の分野においても自己規制的動きとして、所謂、適材適所という使い方がある。これは金属は金属なりに、ポリマーはポリマーなりに、その適所を得て使いこなすところの組合せ材料であって、スペースシャトル、人工衛星などには、このような使い方が典型的に示されている。また、相互拡散的な使用法はとりもなおさず複合材料である。これは微視的構造では金属、ポリマー、セラミックスが微少領域を占有するが、特性としては、そのいずれにも依らない。

新しい状態を示す。現在まで、複合材料はむしろ、新しい建材、機械部品用として、その強度、耐候性などに主眼をおかれて来たが、それらの機能を組合せた新機能材料としての将来が愉しみである。たとえば、生体材料として最も普通の「骨」は、ハイドロオキシアパタイトとコラーゲンの複合されたもので、コラーゲンのピエゾ・エレクトリック効果があつてはじめて安定する。宇宙飛行士があまり長く無重力環境におかれると、骨が折

れやすくなるといわれるのも、ピエゾ・エレクトリック効果が発揮できない環境では、カルシウムが筋肉に吸収される方向にあると考えられる。結果論的に強調するならば、これからのセラミストはセラミックスに深い知識をもつと共に、広い視野をもち、他の材料をも理解して、相携えて新しい材料の時代を迎えてもらいたいということである。

## 浜田庄司先生を偲ぶ

島岡達三



浜田先生が亡くなられてから早や2年近くが経つ。あれ程御元気で精力的に仕事をなさり、八十才になられても少しも衰えを感じさせなかった先生が、昭和五十一年の秋、発病なさってから我々の悲願も空しく、五十三年一月五日、八十三才の誕生日を迎えて間もなく遂に永眠なされた。先生は明治二十七年神奈川県溝ノ口に生れ、象二と命名された。大正二年東京高等工業学校窯業科入学、同五年卒業。在学中は板谷波山に学び、先輩河井寛次郎を識った。卒業後京都陶磁器試験場に入所、技法釉薬の研究を行った。大正九年バーナード・リーチに同行英国に渡り、セントアイヴアスの築窯に携わり、大正十三年帰国、栃木県益子に入った。昭和五年益子に住居を同六年登窯を築き、爾来一貫して益子に腰を据えて制作を続けた。其の間柳宗悦・河井寛次郎と共に民芸運動を

起し、日本の工芸界に画期的な新風をもたらした。又、柳、リーチ等と共に度々海外での講演展覧会を行い、世界の浜田として広く海外に其名を高めた。昭和三十年重要無形文化財保持者に指定され、同四十三年には文化勲章を受賞した。晩年は日本民芸協会会長並に日本民芸館長に就任、又其の膨大な古今東西に渉る蒐集品を寄贈して財団法人益子参考館を設立、其の完成に情熱を傾けた。

こうして先生の一生涯を振り返ってみると類い稀な天賦の才能に加えて、常にたゆまざる研鑽の積み重ねがある。事実御旅行の際には常にスケッチブックを携行され、あらゆるものから制作の糧となるものを吸収された。又極めて健康で加うるに心を許す生涯の友人達、心置きなく制作を続けられる良き家庭に恵まれた。言わば良き環境で思う存分自分のしたい事をし尽した幸福な一生と言えよう。作風はあくまで健康で力強く生命力に溢れ、これこそ焼物の原点とも言うべきものであった。芸術家の真の評価は死後定まるものである。生前如何に世に持てはやされ高い評価を得ても其の作品が本物でない限り、死後忽ち色褪せてしまうものである。

浜田先生の作品は生前はもとより没後年を経るに従って、益々その声価を高めつつある。この点河井先生と双壁で奇しくも本学の先輩が御二人共々、我国の陶芸界の巨星として永久に輝き続ける事は、我々後作の大いに誇りとする所である。(ご遺族現住所:

〒321-42 栃木県益子町大字益子 3387)

## 水地満穂さんを偲びて

井出善彌



水地さんが逝去されて、早くも一年半になります。昭和53年2月1日。75才でした。

何時か上京の帰途、お宅に泊してのお話中、父は90才近い長命だったので、自分もそれ位はと云って居られたのに、不幸御病気は、肺がん、手術もされず、転移もなく奥さんの手厚い御看護、二ヶ年近き御療養に、御性分通り、静かに御家族の皆さんに見守られて逝かれました様です。

水地さん達の同級は少い方にて、夫々御活躍でしたが早く逝かれた方多く、卒業50年をお祝い下さる同窓会も、同年は大阪にて開催、御挨拶されたい御希望も御療養中にて、吉川さん一人の御出席にて淋しいことでした。

秀才で誠実さが近代陶磁器工業の始祖であられる大倉和親氏の御信頼を得て、同家に住み込み乍らの大岡山、同級の肥田君も一緒だったのでよく伺いましたが、麻布の御邸より目黒駅まで徒歩30分、目蒲線での通学、よく勉強されて特待生でした。大正最後の年15年、卒業と同時に大倉氏の理想、世界最高最良の磁器「良きが上にも良きも

の」を造らんとの御企画の大倉陶園に入られました。日野厚さんの支配人、岩田恒三郎さんの工場長のもとで、副工場長として、青年期の情熱を研究、又生産に、一步一步各種技法の開発究明と安定化をすすめられ、後進の指導、会社の経営にも参画、取締役総務部長、監査役等として、生涯は大倉陶園にささげられ、我国西洋式高級磁器の生産技術向上の先駆者としての御努力は伝統として同社に長く継承されましょう。

又窯業協会会員として東京附近で陶磁器関係の方少く、理事その他の役員として協力され、御専門の数々の御企画に参与、御分担され、又少年向図書として「日本の陶磁器」を著し、その内容は工場の現場写真等多く、業界にも大変有益と感謝されました。昭和46年窯業協会より「陶磁器産業の発展への貢献」されたとして、功労賞を受けられました。

御出身地は愛媛県、奥さんは山形県とはなれた地の御縁ですが、御子様一男二女皆さん秀才にて一流学校御卒業、御多幸な御家庭を持たれ、この点水地さんも御満足、御安心の態でした。

又お宅では色々の植物を集め、小鳥の世話、魚つり等多趣味で、悪遊び一切せず敬愛する友人、何時か私か蔵前工業会誌「この人とひととき」に室町豊氏（鈴木先生）との対談に学校で先生に教わったことより、同好友人を得たのが一番結構でしたと口をすべらせました。その一人が水地さん、ほんとうに有難うございました。まだ十年大丈夫と云われた君、晩秋大倉和親記念賞を戴いた時も、御家庭事情迄知りつくされた君、色々話もして呉れましたらう君、今は亡く、淋しく空しき気持ちです。心より御冥福をお祈り申し上げます次第です。

（ご遺族現住所：〒253 茅ヶ崎市富士見町5-23）



## 故近藤連一教授の急逝を悼む

鈴木弘茂



本会元常任幹事、東京工業大学工学部無機材料工学科教授（名誉教授）近藤連一先生が、昭和54年5月22日に英国のテーラー教授らと前穂高岳に登山中、滑落事故のため忽然として逝去されました。享年58才、まさに学究として働き盛り、誠に哀悼の極みであり悔みてもあまりある痛恨事であります。告別式は6月18日、霊南坂教会において同教会に溢れる800人を越える各界の知名人が会葬されておこなわれ故人の生前の遺徳を物語るものであります。

近藤先生は、大正9年9月17日生まれ、昭和19年9月に東京工業大学窯業学科をご卒業の後、特別研究生を経て、同24年3月母校の助手に就任され、同35年同学工業材料研究所助教授、同45年3月に工学部無機材料工学科教授になりました。母校に実に30年の長きにわたって在職され、教育と研究に目覚ましい活躍をされました。

先生は無機材料工学を専攻され、特にセメント化学の分野では世界に並ぶものない碩学になら

れました。大学卒業直後から高硫酸塩スラグセメントをはじめとする各種セメントについて、水和反応あるいは焼成反応に重点をおいて系統的に研究を進められ、最近ではセメントの補強や混和剤についても精力的に研究されて学界のみならず産業界の進歩発展に大きく寄与されました。そして昭和40年には窯業協会論文賞を、48年にはセメント協会論文賞を受賞されておられます。

この間に教育者として後進の育成には格別ご熱心で、先生の門下からは今日本邦セメント工業界などで指導的あるいは中堅的技術者、研究者として活躍している多くの人材が輩出しております。加えて、“頼まれたことはいやと言われない無類のやさしい先生”であり、高潔な人格者であられましたので先生を慕って師事する者は非常に多く海外にまで及んでおりました。

また、学内にあつては学科主任、図書館委員会、教育委員会、発明委員会等多くの委員会の委員として大学の運営に貢献されるとともに学外にあつても窯業協会、セメント協会、材料科学会など多くの学協会の理事や各委員会の委員や委員長として、学会、産業界で活躍され、夫々の発展に多大の貢献をしてこられました。

このような偉大な先生の突然のご逝去は、誠に残念至極であり、暗夜に燈火を失ったようにとまどっておるものが多いのであります。

数々のご功績をたたえつつ、本会に与えられた多くのご尽力に深い感謝を捧げ心からご冥福をお祈り申上げる次第であります。

（ご遺族現住所）

〒152 東京都目黒区柿の木坂 2-25-23

### 訃 報

この2年間に、以下の方々が故人とされました。謹んで哀悼の意を表します。

佐々木 健 介 氏 明治44年卒業  
坂 東 文 市 氏 大正 3年卒業  
高 橋 英 治 氏 大正 4年卒業  
上 山 節 氏 大正 5年卒業  
浜 田 象 二 氏 大正 5年卒業  
岩 崎 嘉 助 氏 大正 6年卒業

石 井 喬 氏 大正 9年卒業  
高 野 忠 氏 大正 9年卒業  
岡 本 権太郎 氏 大正11年卒業  
桜 川 貞 雄 氏 大正12年卒業  
田 中 木 弥 氏 大正14年卒業  
水 地 満 穂 氏 大正15年卒業

本 間 五 郎 氏 昭和 3 年卒業  
吉 浦 豊太郎 氏 昭和 4 年卒業  
尾 関 稲 氏 昭和 5 年卒業  
橋 本 享 氏 昭和 11 年卒業  
藤 井 正 雄 氏 昭和 12 年卒業

池 田 卯 一 氏 昭和 14 年卒業  
中 村 八 助 氏 昭和 16 年卒業  
近 藤 連 一 氏 昭和 19 年卒業  
山 岸 茂 氏 昭和 33 年卒業

### 第 15 回 Dr. G. Wagener 記念公開学術講演会

昭和 53 年 2 月 9 日 (木), 本館第 1 会議室で, 「電子回折によるセラミックスの研究」と題して, 無機材質研究所所長山口成人博士の講演が行われ, 博士の多年に亘る研究内容の紹介があり, 参加者約 100 名に深い感銘を与えた。

### 第 16 回 Dr. G. Wagener 記念公開学術講演会

昭和 53 年 10 月 9 日 (月) に, 南棟 413 講義室において開催された。今回は, 齊藤進六学長の教授退官を記念する新セラミックス国際会議に引き続いて行なわれたため, 約 20 名の外国人を含めて 200 名以上の方々が出席された。

講演に先立ち, 西ドイツ大使館科学参事官 S. von Krosigk 博士より, ワグネル先生に関する紹介と挨拶がなされた。はじめの講演は, 西ドイツマックスプランク研究所粉末冶金研究室教授 G. Petzow 先生の「状態図; その過去, 現在およ

び未来」で, 最近特に問題となっている窒化物等を含む多成分系に関する内容であったため参加者の興味を集めた。ついで, アメリカ合衆国カリフォルニア大学バークレイ校教授 J. A. Pask 先生の「高温におけるセラミック材料の機械的挙動」についての講演があり, これも時宜を得たテーマで, 出席者に多大の感銘を与えた。講演後, 懇親会が行なわれた。

(宗宮重行, 吉村昌弘)

### 昭和 53 年度総会および懇親会

昭和 53 年度の総会と懇親会は 6 月 1 日, 本学新食堂で百余名の出席者を迎えて盛大に開かれた。

当日はこれに先立って, 改修工事の完了したワグネル先生記念碑を囲んで献花式が行われ, 昔の思い出を新たにした。

総会は会務報告と会計報告が承認され, 次期役員については会長一任となった。

ついで, 昭和 3 年卒業の井出善彌, 住田隆一, 角田頼保, 寺門常次, 肥田権平, 本間五郎, 前川清三, 松崎錠三, 水上義介, 横瀬信次の諸氏に, 卒業 50 周年記念として, 例年の通り加藤鈔氏の作品が贈られた。

引続いての懇親会は長谷川安利幹事の司会で進められ, 新入会員や大学院生なども交えて, 8 時過ぎまで楽しいひとときを過ごした。

### 昭和 52 年度収支報告

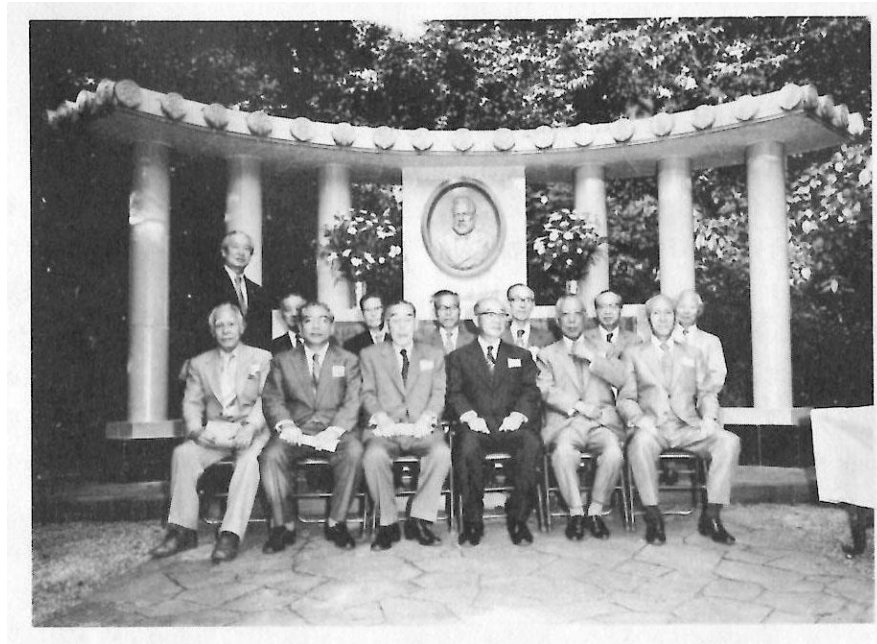
自 昭和 52 年 4 月 1 日 至 昭和 53 年 3 月 31 日

#### 収 入 の 部

前年度繰越金	1, 048, 094 円
総会・懇親会費	392, 000
事業資金寄付	664, 500
広告代	800, 000
銀行利子	12, 304
計	2, 916, 898

#### 支 出 の 部

52 年度 総会懇親会費	500, 215 円
記念品代	100, 000
名簿印刷代	1, 408, 000
名簿発送代	157, 914
印刷代	227, 500
役員会賞	49, 810
器具文具	76, 230
通信賞	93, 550
謝礼 アルバイト代	15, 000
雑賞	23, 595
次期繰越金	265, 088
計	2, 916, 898



## 昭和 52 年度事業資金寄付者芳名

(敬称略)

10,000 円

山内 俊吉, 江副 勇馬, 小島豊之進, 伊奈長三郎, 岡本 十郎, 小林 力, 斎藤 久明,  
倉田 元治, 笹沼宗一郎, 鮎川 武雄, 安保 英司, 福井 哲, 鈴木 重夫, 石塚 正信,  
中山 一郎, 西田 一雄

8,000 円

宇野 達路, 深田 義, 毛利 純一, 長崎 勸, 吉武 素水

7,000 円

田村 忠臣, 堀口 順康

6,000 円

岩崎 郁夫

5,000 円

亀井 四郎, 長崎 準一, 田中 博一, 赤沢 次男, 大里 陽一, 羽田 晃治, 吉田 一栄,  
大石 信男, 紀本礼一郎, 若林 滋, 倉田 貢, 真保 義郎, 高橋 俊郎, 三沢 賢一,  
池ノ上 典, 熊倉 正三, 升水 政幸, 飯塚 誠厚, 佐野川 健,

4,500 円

大場 立夫

4,000 円

中村 周清, 竹沢 義郎, 猪股 吉三

3,000 円

森 元邦, 角田 頸保, 森谷 太郎, 安斎 和雄, 田辺 昌之, 平野 英昭, 芝原 雅弥,  
安竹 了和, 前沢 秀憲, 加藤 健造, 岩切 一良, 浅田 敬徳, 梅原 一正, 伊藤 正三,  
遠藤 敏夫, 浅野 正和, 大槻 俊夫, 村上三五郎, 木船要太郎, 川浪 重年, 斉藤 勝一

2,500 円

松山 城仁

2,000 円

小山 達夫, 丹羽 誠, 島宗 孝之, 林 宏哉, 中村 厚, 枡本 賜, 桂 宏,  
斉藤 永吉, 加藤 正之, 菊地 光治, 梅田 夏雄, 斉藤 進六, 塩川 皓, 加藤 政良,  
田上 嘉秋, 太田 千里, 素木 洋一, 遠藤 幸夫, 左右田孝男, 境野 照男, 山本準之助,

正田清一郎, 鈴木 節三, 笹沼宗一郎, 河原田次剛, 山本 登, 渡辺 宗男, 日笠 泰行,  
古海 宏一, 磯貝 純, 田辺 三郎, 堀江 鯨二, 稲村 泰, 大熊 奥, 新居善三郎,  
西元 三郎, 西川 洋成, 古丸 勇, 四宮 正善, 矢島一治男, 居上 英雄, 日浦 致,  
福崎 福七, 井出 善弥, 藤井 稔, 加藤 拓, 川田 尚哉, 大内 三男, 江尻 寿憲,  
大野 勝美, 尾野 幹也, 関口 淳, 大庭 宏, 飯塚常太郎, 吉川 俊吾, 青木 斌,  
高浜恒一郎, 山室 忠臣, 中川 順吉, 張 鴻烈, 塚本 行, 高宮 陽一, 酒井 利和,  
入江日出男, 上山 節, 横瀬 信次, 平尾 穂, 石井 峰郎, 佐沢 光夫, 萩原 尚男,  
尾関 稲, 水野 茂樹, 開田 丈夫, 中村藤一郎, 吉田 格, 小泉善之助

1. 500 円

藤井 透

1,000 円

内藤 義一, 塚本 宏, 中村 紀夫, 大川 恒雄, 荒井 康夫, 中村 宏昭, 白石 清悟,  
肥田 権平, 高橋健太郎, 中村 敦, 久保寺正二, 藤田 庸助, 涌井 歳一, 藤田 芳夫,  
今問 明春, 八木 琢夫, 毛利 尚彦, 坂東 文市, 下平高次郎, 横溝政太郎, 藤井 重信,  
黒田 英二, 佐藤 泰, 伊藤 正彦, 加藤 春美, 岩佐 宇一, 田代 楠熊, 水上 義介,  
足立原純一, 後藤 九五, 渡辺 一行, 和泉 正光, 井口 征也, 栗原 直輝, 菊地 武正,  
原 和照, 河村 力, 小林 弘資, 岡田 昌三, 西 晴哉, 長谷川 貢, 山下 寛,  
山本 廣, 脇坂 隆夫, 松永 一郎, 渡辺 哲夫, 二宮 秀明, 成田 正, 影山 静夫,  
滝沢 一貴, 長岡 為行, 臼井 芳一, 巽 昭夫, 木村 勲, 堀口 武, 中島 洋,  
吹田安兵衛, 一樣 敏夫, 佐藤 功, 福岡 康雄, 山形 安一, 一色徳一郎, 美崎 敬之,  
塩田 政利, 宗豫 元介, 鶴飼 秀介, 田村 信一, 長谷川 泰, 島森 融, 木村 脩七,  
長谷川 安, 水谷 惟恭, 名取 賢荘, 加藤 誠軌, 桑山 則彦, 田賀井秀夫, 友田 正雄,  
野口 長次, 奥田 進, 中沢三知彦, 江藤 哲夫, 大槻 彰一, 田中 広吉, 尾野 勇雄,  
山下 透, 佐々木茂弑, 加藤欽一郎, 柴山 景介, 杉浦 孝三, 山根 正之, 河井 信雄,  
福浦 雄飛, 田端 精一, 奥田 博, 岩井 津一, 内藤 繁, 向井 敬一, 赤尾 洋二,  
小坂 丈予, 牧村 信之, 中川善兵衛, 清水 広, 鈴木 敏弘, 水野 章, 持田 滋,  
山崎 享, 木島 昇, 吉見 恒雄, 近藤 連一, 山浦禮次郎, 牧島 亮男, 金武 典夫,  
他 2 名

昭和 54 年度総会および懇親会

昭和 54 年度の総会と懇親会は 5 月 17 日, 東海支部のお世話でホテルニューナゴヤに於て 70 名の出席者を得て開かれた。

総会では, 会務報告と会計報告が承認されたのち, 次期役員について山内前会長から次期会長に森谷太郎氏を推したいとの発言があり了承された。副会長以下の役員については別表の人事が了承された。

ついで, 昭和 4 年卒業の, 大石信男, 加藤正之, 佐沢光夫, 菅原兵衛, 田辺三郎, 中尾竹次郎, 以上 6 名の方々に卒業 50 周年記念として例年の通り加藤鈔氏の作品が贈られた。

引続いての懇親会は柴田茂東海支部長の司会で賑やかに思い出と語らいのひとときを過した。

昭和 53 年度収支報告

自 昭和 53 年 4 月 1 日 至 昭和 54 年 3 月 31 日

収 入 の 部

前年度繰越金	265,088 円
総会・懇親会費	335,000
事業資金寄付	741,675
銀行利子	2,776
計	1,344,539

支 出 の 部

53 年度 総会懇親会費	479,670 円
記念品代	100,000
印刷代	168,600
役員会賞	93,264
通信賞	83,610
謝礼	15,000
次期繰越金	404,395
計	1,344,539



### 昭和 53 年度事業資金寄付者芳名

(敬称略)

- 30,000 円  
鮎川 武雄
- 20,000 円  
山内 俊吉, 笹沼宗一郎, 50年受賞者
- 17,625 円  
昭和 23年卒有志
- 15,000 円  
倉田 元治
- 10,000 円  
鈴木 重夫, 長崎 勸, 福井 哲, 島岡 達三, 西田 一雄, 吉田 一栄, 河嶋 千尋,  
田中 博一, 江副 勇馬, 中山 一郎
- 8,000 円  
安保 英司
- 5,000 円  
尾崎 義治, 斉藤 永吉, 藤井 豊男, 毛利 純一, 末野 悌六, 新庄 重生, 吹田安兵衛,  
真保 義郎, 星野 勉, 斉藤 久明, 石塚 正信, 西田 一雄, 長崎 準一, 並河 洋,  
岡本 十郎, 小島豊之進, 鈴木 正義, 木島 昇, 斉藤 進六, 半谷 豊, 各務 芳樹,  
村杉 忠信, 小島 博光, 左右田孝夫, 境野 照雄, 加藤 政良
- 3,000 円  
伊藤 正三, 岩崎 郁夫, 高山 泰造, 相原 公敏, 高橋 久男, 日笠 泰行, 平井 修,  
深田 義, 山本 登, 河原田次剛, 大原 功, 光藤 勉, 佐沢 光夫, 佐野川 健,  
音馬 峻, 坂田 正, 渡辺 宗男, 田山 精一, 矢島一治男, 堀口 順康, 村上三五朗,  
対馬 英二, 国吉 五六, 加藤 正之, 遠藤 敏夫, 奥田 進, 太田 達雄, 大槻 俊夫,  
浅野 正和, 石井 峰郎, 倉田 貢, 川浪 重年, 杉浦 正敏, 梅田 夏雄, 井出 善弥,  
田上 嘉秋, 宇野 達路, 若林 滋, 安竹 了和
- 2,000 円  
猪股 吉三, 伊藤 豊成, 金武 典夫, 八木 琢夫, 関口 淳, 渋谷 益男, 吉田寛一郎,  
江口 民行, 島村 弘之, 塩川 皓, 永楽 秀光, 成田 正, 池ノ上 典, 四宮 正善,  
向井 敬一, 埜崎 堅造, 入江日出男, 古海 宏一, 瀬高 信雄, 松本 旭, 渡辺 一行,  
長谷川 泰, 西元 三郎, 竹沢 義郎, 野村 三治, 遠藤 幸雄, 森 元邦, 雨宮 正,  
田代 楠熊, 佐々木茂弑, 中沢三知彦, 島宗 孝之, 秋山 方宏, 中川 順吉, 二宮 秀明,  
福崎 福七, 小出 儀治, 羽田 晃治, 遠藤 貞, 加藤 守光, 高橋紘一郎, 加藤 誠軌,  
友田 正雄, 亀井 四郎, 井関 孝善, 飯塚 誠厚, 岡田昭次郎, 江藤 哲夫, 草間 保,  
小坂 丈予, 鈴木 弘茂, 宗宮 重行, 近藤 連一, 長谷川安利, 浜野 健也, 田中 広吉,  
田辺 昌之, 杉浦 孝三, 菊池 武正, 水野 茂樹, 中村 周清, 寺門 常次, 美崎 敬之,

川田 尚哉, 木島 弑倫, 黒田 泰弘, 森下 一郎, 松崎 錠三, 大津賀 望, 大場 立夫,  
桂 宏, 田村 忠臣, 毛利 良雄, 出口 茂, 田平 伸生, 石毛健二郎, 丸茂 文幸,  
磯貝 純, 江尻 寿憲, 居上 英雄, 海老 昱雄, 張 鴻烈, 内山 浩

1,500 円

松山 城仁, 田中 貞夫

1,000 円

加藤 博之, 吉谷川 貢, 石橋 和史, 松永 一郎, 白石 清梧, 藤井 透, 開田 丈夫,  
中川 邦好, 牛尾 欣一, 中村 敦, 中村 紀夫, 江上 明, 足立原純一, 稲村 泰,  
平井 正弘, 日浦 致, 山本 信男, 真田 義彭, 渡辺 美博, 田賀井秀夫, 萩原 尚男,  
北島 罔夫, 藤井 洋治, 伊奈辰次郎, 坂本 洋一, 中島 直, 黒田 永二, 平尾 穂,  
高宮 陽一, 富塚 功, 山内 祐次, 藤井 稔, 横山 武, 大内 三男, 菊池 光治,  
奥川 恭平, 足立 保彦, 内藤 繁, 今間 朋春, 木戸 雄二, 佐藤 文良, 丹羽 誠,  
河田 幸司, 紀本礼一郎, 大井修一郎, 島田 信郎, 大木 通胤, 宇都官泰造, 後藤 九五,  
中村 哲朗, 水野 章, 高橋健太郎, 井上 圭吉, 飯塚常太郎, 御代健次郎, 白土 一男,  
貫井 昭彦, 安田 栄一, 渡辺 信彦, 坂東 文市, 山崎 享, 一色徳一郎, 佐藤 功,  
山本 次郎, 藤村 宗平, 北村友太郎, 鶴飼 喬介, 酒井 利和, 阿部 善弘, 前川 清三,  
浅田 敬徳, 塚本 昇, 佐藤 康, 小玉 正雄, 田中 英彦, 太田京一郎, 上西 義介,  
水野 淳二, 植松 敬三, 木村 脩七, 耕山 荀郎, 小泉善之助, 山根 正之, 尾野 勇雄,  
吉田 格, 素木 洋一, 鷹木 清, 長岡 為行, 斉藤 安俊, 河井 信雄, 中川善兵衛,  
持田 滋, 加藤欽一郎, 斉藤 鶴義, 大矢 真吾

## 東京工業大学における窯業教育の歴史的経過

我国における近代的な窯業教育は本学の前身である東京職工学校において開始された。

明治14年5月26日、浅草蔵前の地に創立された**東京職工学校**には、化学工芸科と機械工芸科とが置かれたが、明治17年に、化学工芸科の専修科目としてワグネル博士による窯業学が開講され、翌18年4月には実習工場が設けられて小型の硝子熔融窯と陶磁器焼成窯とが新設された。明治19年8月には上記の2学科を各専門にわけることになって**陶器玻璃工科**の名が現われ、明治20年にはワグネル博士の関係した赤坂葵町の農商務省陶器試験所が当校に移設された。

明治23年3月、東京職工学校が**東京工業学校**と改められて、ドイツから最新の試験器具を購入し、窯炉、機械等の設備を新設して、明治27年には科名を**窯業科**と改称した。

明治34年5月、東京工業学校が**東京高等工業学校**に昇格したが、その際の6学科のひとつである窯業科の初代科長には工学博士高山甚太郎が任命された。大正3年には、大阪高等工業学校の窯業科を合併して名実共に我国最高の窯業教育機関となり、付属工場を増設し、実験室および実

験設備が整えられた。この時代の教官は科長平野耕輔、工場長芝田利八、教授近藤清治および大阪高工から転任の教授金島茂太の諸氏が中心であった。

大正12年9月の関東大震災は窯場以外の窯業科の全設備を灰塵と化した。止むを得ず、窯業科は駒場の帝大農学部に住住いしたのち、翌年、大岡山駅北側に建てられたバラック校舎に移転したが、しばらくの間は実験もできない状態であった。

昭和4年4月、官立工業大学の官制が制定されて、東京高等工業学校が**東京工業大学**に昇格して、8学科が置かれた。同時に、高工当時の科名である窯業科が**窯業学科**と改められたが、当時の学生定員は25名であった。大学昇格当時の主任教授は工学博士近藤清治で、翌年には硝子担当の教授として工学博士田端耕造が就任した。また、国産第1号のX線回折装置をはじめとして、各種の最新鋭研究設備が導入されて、研究の意気が大いに上がり、昭和7年には学部第1回の卒業生10名を送り出した。昭和9年5月にはバラック校舎か

ら新しく竣工した本館の建物に移転し、翌年には工場と窯場も完成した。

支那事変の勃発と戦局の進展は窯業技術者に対する需要を急増し、昭和15年4月に**臨時工業技術員養成所**が設置されて、中等学校卒業生を対象として1ケ年の短期間で専門学校程度の教育が開始された。さらに、昭和20年度には**附属工業専門部**の窯業科（定員40名）が開設された。しかしながら、太平洋戦争の終結によって、臨時工業技術員養成所は昭和21年3月をもって閉鎖され、附属工業専門部は昭和23年に第1回の卒業生を出しただけで廃止された。

昭和18年1月には窯業材料に対する研究の重要性が認められて、**窯業研究所**の官判が公布され、所長事務取扱いとして平野耕輔、所長付として教授山内俊吉、専任所員として教授河島千尋、教授鈴木信一その他の諸氏が任命され、学部窯業学科の教官のほとんどが兼任所員となった。

太平洋戦争への突入によって学生生活は大きな影響を受け、勤労奉仕等の出勤が多くなって完全な授業は不可能となり、卒業も繰上げられて昭和16年には3月と12月の2回学部の卒業式が行われ、昭和17年から昭和22年の間は9月卒業となった。

戦争の終結に伴って実施された学制改革によって、昭和24年から**新制大学**が発足し、昭和28年3月には旧制最後の卒業生と新制第1回の卒業生が同時に送り出された。当時の窯業関係の教官は教授山内俊吉、教授河島千尋、教授森谷太郎の諸氏が中心であった。

新制度による大学院は昭和28年度から発足し、窯業関係でも昭和30年に最初の**修士課程**

修了者を、昭和37年に最初の**博士課程**修了者を送り出した。

本学では、戦後のいわゆる和田改革によって学科制度が廃止されたが、昭和35年にこの制度が復活されることとなって、**無機材料工学科**の学科名が生れた。なお、学科制度が廃止されていた期間中も、窯業関係の研究室および卒業生の団結は強く、窯業同総会は従前通り維持されていた。

昭和33年3月、窯業研究所と建築材料研究所とを統合、整備して、新たに**工業材料研究所**が設置された。

昭和33年8月には、山内俊吉教授が学長に就任した。

新制大学の発足とともに、大学の組織と在学生数は急速に膨脹し、昭和30年7月には工学部から**理工学部**に、昭和42年6月には**工学部**と**理学部**とに分離した。大学院の組織も、発足当時の**大学院工学研究科**が昭和31年4月に**大学院理工学研究科**となり、昭和50年4月には新たに学部をもたない**大学院総合理工学研究科**が生れた。

現在の東京工業大学は理学部および工学部に合計21の学科をもち、学部学生の定員の合計は774名で、そのうち無機材料工学科の定員は22名である。

これに併置されている大学院理工学研究科の無機材料工学専攻は、修士学生定員16名と、博士学生定員6名をもっている。

長津田地区に建設中の大学院総合理工学研究科は10の専攻から成り、修士学生定員250名、博士学生定員75名をもっているが、窯業関係者は材料科学専攻に所属している。

## 母校の現状

現在、東工大は工学部、理学部および4つの研究所から成り立っており、窯業同窓会関係者は工学部の無機材料工学科（5講座）、工業材料研究所（6部門）および原子炉工学研究所（1部門）に所属しています。

学部は理学部が5学科、工学部が16学科から構成されていて、現在約3,400人の学生が在学しています。大学院には理工学と総合理工学の二つの研究科が設置されており、修士課程に約1,200人、博士課程に約400人の学生が在学しています。

学部学生と大学院学生を合計すると学生の総数は約5,000人になりますが、これを教育する教授陣並びに円滑な教育研究の運営を補佐する教職員の現在員数は別表のとおりで、学部学生4人に対し教官1人の割合で指導していることとなります。

東京工業大学の構成と教職員数

		大学の構成	教職員数
学部・大学院	理学部	大学院理工学研究科	学長 1
	工学部		
附置研究所	—	大学院総合理工学研究科	教授 215
	資源化学研究所		助教授 194
	精密工学研究所		講師 3
	工業材料研究所		助手 450
附属研究施設	原子炉工学研究所		その他の職員 786
	天然物化学研究施設		計 1,649
	像情報工学研究施設		(昭和54.5.1現在)
	資源循環研究施設		
附属機関等	水熱合成材料実験施設		
	附属図書館		
	保健管理センター		
	教育工学開発センター		
	総合情報処理センター		
	理工学国際交流センター		

学部は類別入学制をとっており、1年次学生は1類（理学系）、2類（材料系）、3類（応化系）、4類（機械系）、5類（電気系）、6類（建設系）に分かれて入学し、2年に進むときに志望と成績順に各学科に所属します。無機材料工学科（学生定員20名）に進む学生は2類に入学することになっています。2年次および3年次では無機材料

工学の基礎および専門科目について勉強し、4年生になると各研究室に所属して卒業研究に従事します。

学部学科及び類別学生定員					
学部	類	学科名	定員	類別定員	
理学部	第1類	数 学	20	153	
		物.理 学	25		
		化 学	40		
		応用物理学	34		
		情報科学	34		
工学部	第2類	金属工学	34	74	
		有機材料工学	20		
		無機材料工学	20		
	第3類	化学工学	75	118	
		高分子工学	34		
	第4類	経営工学		9/34	170
				25/34	
		機械工学	60		
		生産機械工学	34		
		機械物理工学	34		
	第5類	制御工学		17/34	146
			17/34		
電気・電子工学		55			
第6類	電子物理工学	34	113		
	情報工学	40			
	土木工学	34			
		建築学	45	113	
		社会工学	34		
計			774	774	

大学院は、大岡山地区に併置されている大学院理工学研究科無機材料工学専攻が、修士課程学生定員16名、博士課程学生定員6名をもち、化学工学専攻、および高分子工学専攻と共同で運営されており、学生定員の1/2は学内推薦で、のこりは一般選考によって充足しています。

大学院総合理工学研究科に属する材料科学専攻は、従来からある工業材料研究所を母体として新設されたもので、学際的研究分野をカバーする



という新しい構想に基づいて昭和50年に生まれた学部をもたない大学院で、昭和54年度に長津田の新キャンパスに移転しました。材料科学専攻は従来からある工業材料研究所を母体として新設されたもので、専攻の教官の多くは工業材料研究所所属の教官が併任されています。

大学院研究科の専攻名		
理工学研究科		総合理工学研究科
数 学 物 理 学 化 学 応用物理学 情報科学 金属工学 繊維工学 無機材料工学 化学工学 高分子工学	機械工学	物理情報工学
	生産機械工学	電子化学
	機械物理工学	社会開発工学
	制御工学	精密機械
	経営工学	システム
	電気工学	材料科学
	電子工学	電子システム
	電子物理工学	化学環境工学
	土木工学	生命化学
	建築学	エネルギー科学
	社会工学	システム科学
	原子核工学	



無機材料工学科が移転する予定の旧工業材料研究所建物

## 大岡山だより

無機材料工学科は本学の各学科のうちで学生の定員は少ないものの、当節は人気のある学科のひとつで、在学生の成績も俊良です。学部の卒業研究の際には、無機材料工学科の各研究室ばかりでなく、工業材料研究所および原子炉工学研究所の関係研究室を志望することができます。

卒業生の就職も順調で、求人数が就職希望者の10倍近くもあるという状況ですが、学部卒業生の2/3以上は大学院に進学するので、就職の対象となるのはほとんどが修士課程修了者です。それから、従来は大学院理工学研究科の無機材料工学専攻は化学工学専攻および高分子工学専攻と共同で運営されていたので、卒業証書も昨年までは化学工学専攻修了となっていました。今年からはそれぞれの専攻に専攻主任を跟いて、無機材料工

学専攻修了という証書を受けることができるようになりました。

### 材質工学系各分野の学部学生定員(昭和52年度)

		無機材 料工学	金属工 学系	応用化 学系	繊維工 学系	理学部 化学系
国 公 立	大学数	3	20	49	9	29
	学科数	3	28	67	16	33
	学生定員	112	1,159	4,374	685	1,180
私 立	大学数	0	5	29	0	13
	学科数	0	5	42	0	13
	学生定員	0	470	4,040	0	1,004
合 計	大学数	3	25	78	9	42
	学科数	3	33	109	16	46
	学生定員	112	1,629	8,414	685	2,184

現在わが国で、無機材料関係の技術者を組織的に養成している大学は、本学の他に名古屋工業大学および京都工芸繊維大学を数えるだけで、博士課程の置かれている大学は本学に限られています。このような現状は金属材料や高分子材料などの現状と比較して著しく弱体であることを否定することができません。ライバルが少ないということは、当人たちにとっては稀少価値にめぐまれていることとなりますが、わが国における関連技術を飛躍的に発展させるため、学生定員の増加が社会的に要請されています。

施設面での大きなニュースとしては、来年6月頃に予定されている無機材料工学科の石川台地区への移転があります。現在学科が使用している本館1階の西北地区と窯業工場および窯場は本館建物建設以来の由緒ある場所ではありますが、狭隘で老朽化しており、学科の将来の発展を考慮してこの際移転することに決まったものです。

トンネルの南側の石川台地区にあった資源化学研究所、精密工学研究所、工業材料研究所およ

び天然物研究施設は今年の6月までに長津田キャンパスに移転を完了し、その跡地の整備が進んでいます。旧資源化学研究所の建物は有機材料工学科が使用することになり、改装工事も終わって、10月に移転が行われたばかりです。

無機材料工学科は旧工材研建物と旧天然物研究施設建物に移転する予定で、建物の改修計画が進んでいます(前頁参照)。また旧天然物研究施設の建物には全学共同利用の分析センターが併設される予定で、これを当学科でお世話することになっています。移転後の無機材料工学科の建物延床面積は約3000m<sup>2</sup>で、分析センターのそれは約1200m<sup>2</sup>です。

本年5月22日に、近藤連一教授が不慮の町故で急逝されたことは、無機材料工学科にとって計り知ることのできないほどの痛手でしたが、11月から非晶質材料講座に鈴木教授を迎えて学科の再建に踏み出したところです。

## 長津田だより

岩井津一、佐多敏之、丸茂文幸

工業材料研究所は本年の6月初旬、横浜市緑区にある長津田キャンパスに移転した。移転の計画は良い年月をかけて検討されたものであり、以前に移転している精密工学研究所や資源化学研究所の経験を参考にできたこともあって、作業は順調に進行した。移転の際には3月位研究がストップするのではないかと心配されたが、7月の初旬には殆どどの研究室で研究活動が再開された。

長津田キャンパスは東急田園都市線のすずかけ台駅で下車徒歩5分のところにある。キャンパスの総面積は約210,000m<sup>2</sup>で、地形は起伏に富み、周囲を緑の斜面に囲まれた落ち着いた環境にある。

工業材料研究所は駅に近い通用門(すずかけ門)を入るとすぐ右手の位置にある。ここに、地上6階地下1階の高層棟と、これに続く低別棟、水熱合成実験施設棟、超高压実験棟および低温実験棟が並んで立っている。建物の延床面積は約6100m<sup>2</sup>で、大岡山時代の4500m<sup>2</sup>に比べて35%増えたことになるが、このうちの約2300m<sup>2</sup>は特殊設備の実験棟にあてられている。高層棟は工材研の本館で、1階には所長室、事務室、会議室等がある。低層棟には工場および建築材料関係の実験室がある。

昭和43年にはじまる長津田キャンパスの建設に伴って、昭和50年4月に発足した大学院総合

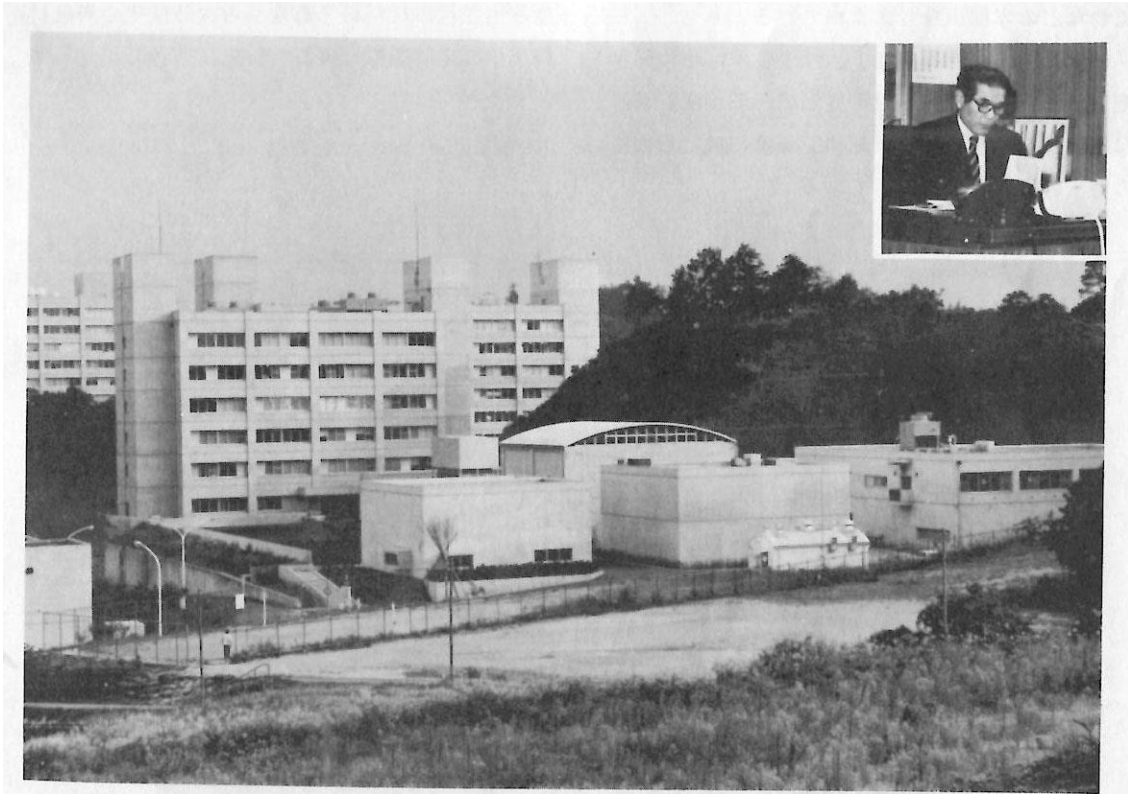
理工学研究科は全国の大学に先駆けて学際的な学問領域を狙った新しい組織の大学院大学である。これには物理情報工学専攻、電子化学専攻、社会開発工学専攻、精密機械システム専攻、材料科学専攻、電子システム専攻、化学環境工学専攻、生命化学専攻、エネルギー科学専攻、およびシステム科学専攻が含まれている。

材料科学専攻は2講座の基幹講座と10講座の協力講座(工業材料研究所から7部門、精密工学研究所から2部門、理学部物理学科から1講座)から成り、これを専門別にするると金属材料関係が4講座、無機材料関係が7講座、物理学が1講座となる。専攻の建物としては、G3棟の3階~7階が建てられている。

材料科学専攻に入学する学生は、金属工学と無機材料工学関係の出身者が多いが、機械、電気、鉱物などの学部出身も含まれている。

材料工学専攻課程を修了した学生は、昭和50年度31名、51年度23名、52年度24名、53年度27名、54年度25名(予定)で、昭和53年度にははじめての博士課程修了者を出している。

材料科学専攻に所属する職員や学生の出身が異なり、同じ専攻の中で他分野の専門家と接触して相互交流の機会が多いことは、今後の無機材料の発展に大きく寄与するものと期待している。



工業材料研究所の全景と吉岡所長

材料科学専攻修了者のうち無機材料工学関係者は窯業同窓会に入会しているが、同時に材料科学同窓会にも入会しており会員の資格等は今後検討を要する問題である。

また、東京工業大学のキャンパスが大岡山と長津田のふたつに分れてしまったことによって、講義や会議のための人の往復や図書館の問題など不便な点が多くなった。しかしながら、緑の谷間

に近代的感覚の建物が立ち並んだ長津田キャンパスは、従来の日本の大学のイメージとは大分違ってのびのびと研究に打ち込める雰囲気を持っている。真新しい工業材料研究所から多くの輝しい業績が生み出され、材料科学専攻から次の世代の無機材料工学の発展を担う優れた研究技術者の巣立っていくことを信じている。



材料科学専攻の建物

# 現代工業技術のタイムカプセル

粉体粉末冶金関係製品標本 235 点が寄贈される！

平野陶磁器コレクションについては前号でご紹介しましたが、粉体粉末冶金協会創立 20 周年の記念事業として 1977 年の時点における当該技術の水準を示す代表的製品をタイムカプセルとして後世に伝えるべく計画され、このほど関係製品の標本各組が本学と金属博物館（仙台）および国立科学博物館に寄贈されました。

この標本は、焼結機械構成部品関係製品 83 点、超硬合金関係製品 39 点、タングステン・モリブデン関係製品 36 点、フェライト関係製品 44 点、焼結電子材料関係製品 33 点から成り、それらは何れも現在工業的に生産されている製品で、わが国の技術の最高水準を代表する品々であり、非常に広範囲の産業分野に関連しています。

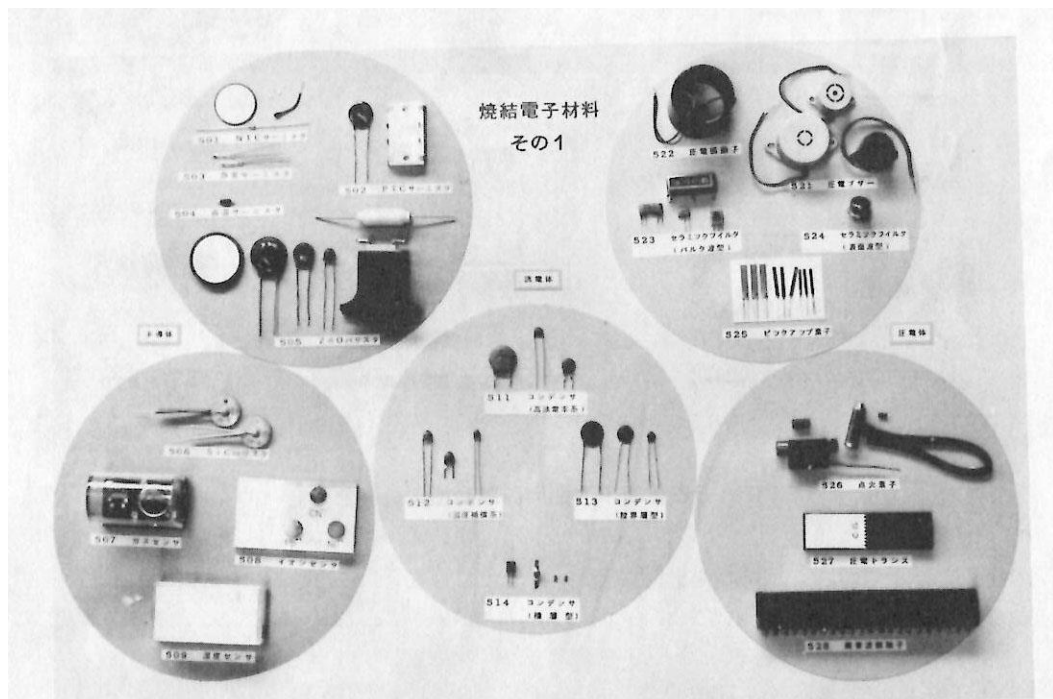
その内容の一部をご紹介しますと、焼結機械構成部品関係では、自動 2 輪車用クラッチ部品、自動車用オイルポンプ部品、タイプライター桁送り部品、ミキサー部品、電動工具部品、洗濯機用減速機部品、コンプレッサー用部品、コンバイン用部品、国鉄新幹線電車用集電すり板、航空機用ブレーキライニング、各種金属原料粉等々の製品があります。超硬合金関係では、ダイヤモンド焼結工具、アルミナセラミックスエ具、TiC-WC 系サーメット工具、超微粒子超硬合金工具、WC-Co 系ボールペン用ボール、スノータイヤスパイク、小径ドリル、トンネルボーリング用チップ、時計ケース

等の製品が、タングステン・モリブデン関係では、各種原料粉末、電球および電子管用フィラメント類、各種電極製品等があります。フェライト関係では、カセットテープ、マイクロカセットテープビデオカセットテープ、データカセットテープをはじめ、フライバックトランスコア、偏向ヨークコア、磁気ヘッドコア、アンテナコア、磁歪振動子などのソフトフェライト製品、およびマイクロモーター用フェライト磁石、マイクロホン用磁石、電子レンジ用磁石、発電ランプ用磁石等の製品があります。

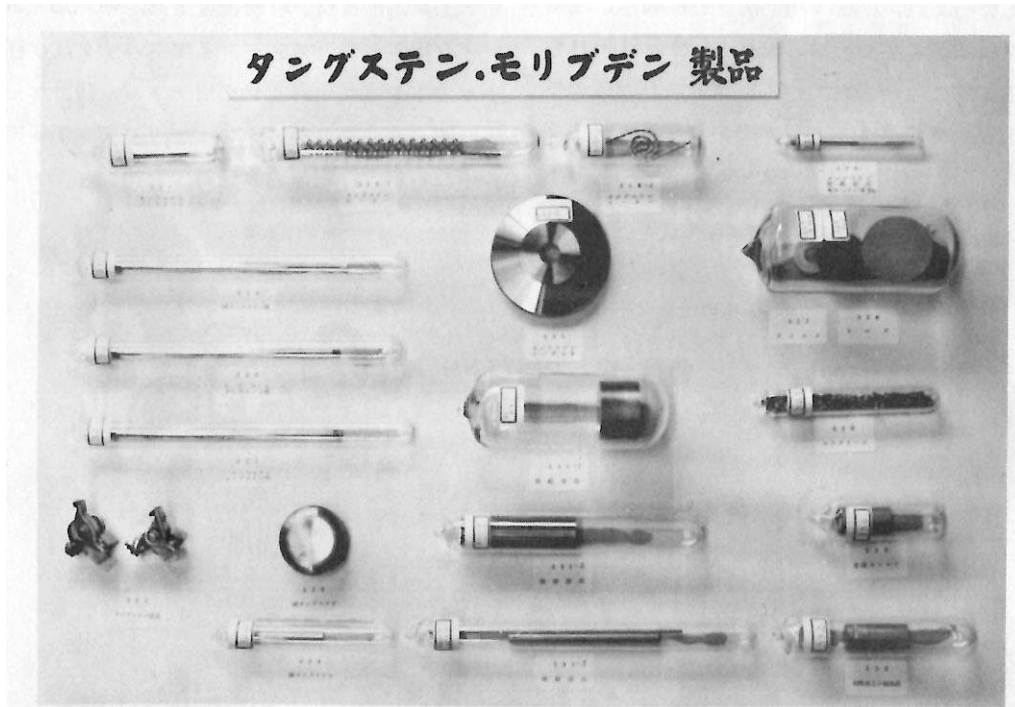
歴史的に価値のある遺産を保存して先人の業績と努力の成果を後世に伝えることは極めて重要であると考えます。明治の開国から 100 年を経て、わが国の現在の国力の大きな部分が工業生産技術の発達によるものであることは否定することのできない事実ですが、この間の産業と技術に関する資料を収容するための施設がわが国では極めて貧弱であるという現実を無視することはできません。

幸いにして本学では、創立 100 年記念事業委員会歴史的に保存する必要のある品々を収容するための記念館の建設について具体的な検討を進めていると伺っていますので、この夢の実現されることを切に希望する次第です。

## 粉体粉末冶金関係製品標本の一部



粉体粉末冶金関係製品標本の一部



## 大学祭で在学生が大活躍

古い時代に卒業された方は、大学祭における研究室の公開、楽焼きやガラスの絵付けの実演などのなつかしい思い出をお持ちのことと存じます。この種の行事は大学紛争以来久しく絶えておりましたが、今年から復活することになり、10月27日、28日に開かれた工大祭では、無機材料工学科の在学生が学科の後援を得て大活躍しました。

当日の出し物は七宝焼で、女子大生等沢山のお客を集めてペンダントの作り方の指導に汗を流しました。

なお無機材料工学科の学生実験には、陶芸、七宝焼、ガラス細工等の実技も含まれています。



## あ と が き

新しい名簿と会誌をお届けします。今年から、名簿の原稿整理と校正を無機材料工学科学生実験室の上西義介技官が担当して下さることになりました。名簿はできるだけ間違いのないようにと心掛けたつもりですが、会員の異動がはげしく、かなりの方々が消息不明になっていることは残念です。転居等の移動の際にはぜひご連絡下さい。また古い時代の方で、名節から脱落している方などについてもご教示下さい。

学内における大きなニュースとしては、今年の夏に行われた工業材料研究所および材料科学専攻の長津田キャンパスへの移転があります。また来年の夏には、工材研等の移転した跡に無機材料工学科が引越しをすることに決り、建物の改修工事がはじまりました。このように、窯業同窓会の母体が2つのキャンパスに分離したことに伴う会の今後の運営については、これから数年かけて問題点を解決したいと考えております。これについての各位のご意見を是非お聞かせ下さい。

今年の5月、近藤連一教授が事故で急逝されたことは無機材料工学科にとって計り知れない程の痛手でしたが、11月から非晶質材料講座に鈴木弘茂教授を迎えて再建にのり出したところです。

最後に同窓会の運営経費のことですが、今回の名簿の作成に要した費用は概算160万円で、郵送料等の約50万円を含めると、広告収入の80万円では到底これを賄うことはできません。前回の名簿発行の際には繰越金によって赤字を補填しましたが、現在手持の繰越金は約40万円で、来年度総会の準備にも費用が必要です。

以上の事情をご賢察の上、本会の事業にご協力いただきます場合には、同封の振替用紙で事業資金(12,000円、1口以上)をご送金下さいますようお願い申し上げます。

事業資金のご送金は下記あてにお願いします。	
銀行振込の場合	第一勧業銀行大岡山支店普通預金口座、口座番号1257281 東京都目黒区大岡山2-12-1 東京工業大学内 窯業同窓会 小坂丈予
郵便局振込の場合	口座番号 東京 0196855 窯業同窓会

昭和54年11月30日印刷  
昭和54年12月5日発行

発行者 窯業同窓会  
編集者 加藤誠軌  
印刷所 有限会社極光印刷